

多角的成果を得る音楽表現指導の指導法

井本 英子

キーワード：『おんまはみんな』、指導教材、音楽表現、音楽あそび、単曲を使った指導展開

本稿は題材に『おんまはみんな』（アメリカ民謡）を使って、単曲での様々な音楽あそびの中で音楽を捉える力を養う音楽表現活動の指導法の教材考案・実践からその有意性を検証するものである。この教材展開の方法は、子どもへの指導経験から培った指導手法を広く指導者が活用できるように体系化した指導法である。この指導法では身体表現活動を基盤として音楽の様々な要素を1曲の中に複合的に取り入れた音楽あそびを展開する。子どもは深く音楽を捉える力を育み生涯にわたって音楽を楽しむことができる素地をつくることができ、指導者も子どもとの楽しい音楽あそびの中で自身の音楽技能を向上させることができるものである。様々な指導者のための研修会^(注1)や指導者養成校^(注2)における授業実践の中から2018年度教員免許状更新講習受講生を対象に講習事後レポートから考察する。

1. 研究背景

1-1 表現活動の中の音楽あそび

幼稚園教育要領¹と保育所保育指針²では幼児期の表現活動の中で音楽に関する項目についてその内容の中で図1のように示している。またどちらも「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」と定義している。表現活動の完成形を到達目標として掲げるのではなく日常生活や他の分野とも相互に関わりながら感動体験を積み重ね表現意欲を高めていくことと理解できる。子どもの音楽活動は、歌唱や楽器合奏に特別に取り組むという姿勢になりがちであるが、指導者には音楽活動を切り離すのではなく子どもの日常生活の中で音や音楽との関わりを見守り共感する姿勢こそが望まれ、子どもが身体を動かしながら楽しい音楽あそびの中で生き生きと自由な音楽表現活動ができる指導が求められる。子どもは楽しい活動体験を積み重ねるというだけでも自分で表現する原動力になり、結果として表現力を養い感性も豊かになる。音楽「あそび」であるので楽しいことが前提の表現活動であるが、

図1 幼稚園教育要領および保育所保育指針における
幼児期の表現活動の中の音楽に関する項目

【幼稚園教育要領】

- (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

【保育所保育指針】

- ② 音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ。
- ④ 歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする。

その中で音楽的な感受性を豊かに育むことができれば音楽体験がますます感動的になり美的情操が育まれることに繋がる。その音楽的的感受性を育むためには音楽を深く捉える力を育む必要がある。子どもは日々の活動で友達と共感する喜びを味わい音楽に合わせて体と心を弾ませ楽しい経験を音楽あそびの中で積み重ねる。筆者は子どもにとって楽しい音楽のあそびという日常の活動を、同時に音楽的な感受性を高めていく目的も達成する活動内容にすることが有意義であると考えている。

1-2 より音楽的な表現活動の音楽あそび

ユーリーズミックスという教育メソッドを提唱するダルクローズ (Emile Jaques-Dalcroze 1865~1950) は『音楽教育メソッドの比較』³の中で「感覚に最もはっきり訴えられる音楽の側面は、リズムと動きであり、さらに、音高とリズムとダイナミクス・エネルギーという音楽の三要素のうち、リズムとダイナミクス・エネルギーは全体的に動きに依存しており、これらの最もよいモデルは筋肉組織の中に見いだされる」、また「テンポの度合いはすべて身体で経験し、理解し、表現することができる。音楽的な感覚の鋭さは、身体的な感覚の鋭さに依存する。集中して音を聴き、身体反応を行うことによって、強い音楽的な力が生まれ、その力は解放される。」と「リズム訓練の理由」の章で述べている。人がいろいろな表情の音楽を捉えるにあたっては、旋律の流れ、和声感、リズム感、フレーズ感、テンポ感、音楽に秘めた情感など様々な要因を複合的に理解し処理をしている。その中でもまずテンポ感を捉えることができると音楽はわかりやすくなる。テンポ感を捉えるということは、拍を感じて拍の流れにのることができる、ということである。それは等速感を養って音楽の流れに容易く同調できることを育むことで培われていく。そしてテンポを身体で経験、理解、表現する音楽あそびは楽しさのみならず音楽的な感覚を磨くことになるわけである。音楽あそびの中で感じたことやイメージしたことを楽しく表現する体験を積み重ねていくことで、深く音楽を捉える力を育み生涯にわたって豊かに音楽を楽しむことができる素地をつくることができる。そのために子どもには楽しく音楽あそびをしてもらうことだけを求める。指導者には指導目的に沿って的確かつ柔軟に子どもの表情・表現に即応することを求める。『おんまはみんな』の楽曲で歌ったり踊ったり合奏したりたくさん音楽活動が展開できるわけだが、その最初の部分、基本となる「音楽に合わせて歩く」部分の指導展開方法を本稿では実例として紹介する。

1-3 音楽あそびの指導のポイント

歌ったり合奏したりする活動を教え込むことなくスムーズに美しい音の響きを楽しめるようにするためには、その音楽を自ら表現したいという欲求が在り、かつ他者の表現活動を認めながら自己表現をする中で他者と融合し共感するときめきや楽しさを感じることが大切である。そこでまず音楽の流れに同調できるように、子どもがテンポ感を捉えて、拍を感じて、拍

の流れにのれるようにする。具体的には「歩く」という一連の動作の中で音楽に合わせて身体の動きをコントロールする。拍の流れを捉えて「歩く」ことから音楽と一体となって動く快感を得て、音楽によってイマジネーションが増し意思や感情の伴った動きとなる。「歩く」中に様々な音楽の要素を組み込んでいくことで、子どもは多彩な音楽表現を反映した身体表現活動ができる。従って歩くことを基本とした様々なリズムあそびの体験を基盤とすることがより音楽的な音楽あそびを展開する指導の第1のポイントとなる。その上で多彩な音楽を体験するためにある一曲でも様々な表情での演奏をしてリズムあそびを展開すること、楽曲を深く捉えるために一つの曲を多角的に体験することも重要なポイントとなる。

1-4 指導者のための研修・授業

筆者のこれまでの指導経験では音楽あそびの経験のない指導者は数多く、実際に子どもに音楽あそびをしていても自分が音楽あそびでわくわく楽しいときめきを経験した人は数少ない。音楽あそびの楽しさだけでなく、その積み重ねから自ら音楽があふれ出て表現活動につながることを実感するために子どもと同じように体験型の受講が必要であると考え。その楽曲表現の指導者の到達目標は様々で、歌、ダンス、合奏等その展開方法は多種多様である。研修（授業）の中でも、楽曲や展開の様子は授業目標によって様々であるが「歩くリズムあそび」が核となればどのようにでも発展させていくことができることを実感してもらうことでそれぞれの指導者によって広く実践されると考えた。

保育者養成及び教員養成課程においては限られた授業時間内で指導法を習得することと学生個々の音楽技能を向上させることが必須事項となる。また現職の指導者にとっても常に自己研鑽ができて音楽技能向上することが望まれる。この指導法の楽曲展開では指導者は等感と豊かな表情に注力することになり子どもの表現から力を得て指導者自身の音楽表現力も豊かになる。子どもの音楽表現活動をするのにピアノ演奏は必須ではないことは述べるまでもない。ここではピアノを用いた活動もする場合のピアノ曲の題材をあげる。本来リトミックを展開していくには指導者の即興演奏力が求められる。しかし即興演奏力は楽曲演奏力に比例してできるものではなく別のスキルが必要であり子どもの自由な動きに即応できる即興演奏力をつけるのは音楽を専門に学ぶ学生にとっても難題である。そこで読譜の負担を軽減し保育者養成校の学生や現職の先生が自分のピアノ演奏力を最大限に活かした音楽あそびが実践できる教材を考え。応用範囲の広い題材を無理なく音楽的に弾ける楽譜で身に付けて幅広く応用できる素材を使う。基本のピアノ奏として自分の演奏技術のレベルに合わせた楽譜を選んで習熟する。本稿では『おんまはみんな』の楽曲を難易度によって4パターン提示する。(付録譜例1~4)^{注3} 後述の指導展開(3-2-1~)のステップのときは譜例2を基準に各譜例を掲載したが一番易しい楽譜(譜例1)で弾く場合も左手パートは自分の弾いている楽譜のままに対応できる。

2. 実践概要

2-1 実践対象

2018年度教員免許状更新講習「心と体がはずむ音楽指導」
受講生54名

実施日：2018年7月28日、29日 於：夙川学院短期大学

2-2 講習プログラム

「心と体がはずむ音楽指導」2018年度1日研修 講習時間：計5時間30分 プログラムタイトルは図2に示す。

2-3 題材について

アメリカ民謡とされている。出典は諸説ある。原題は『The Old Gray Mare』「The old gray mare came tearing (老いた灰色の雌馬が荒地を突き破ってやって来た)」という内容の歌詞である(図3)。日本では中山知子氏が原文にとらわれない作詞をしている。馬は使われているが、2番の子豚はもとの歌詞にはない。「ぱっばか」や「ちょんぼり」の繰り返しがリズムカルで子どもも楽しく歌うことができる。

曲は4分の4拍子 Fdur (へ長調) を基本とするとメロディーの最低音が一点ホ、最高音が二点レになり、歌いやすく、弾きやすい。

A (a-4小節、a'-4小節) **B** (b-4小節) **A'** (a-4小節、a"-4小節) の3部形式(譜例5)。和声は、**A**は主和音I一属和音Vで構成、**B**で下属和音IVがでてくる。メロディーは、全体に付点音符を使った軽快なリズムで捉えやすい。**A**では派生音が入る(譜例5-①)が、音域は4度までで刺繍音として入っている派生音なので難しくない。**B**でメロディーの最高音が出てくる(譜例5-②)。**B**も音域は4度までで**B**フレーズの最後の拍が3連音符(譜例5-③)で5度下降して**A**のメロディーにもどる。この3連音符のフレーズが、**A**に戻ることを明確に導いてくれる。**A**のリズミカルな曲想に対して、**B**は滑らかなメロディーラインで構成されている。

図2 プログラムタイトル

テーマ曲 「おんまはみんな」
音と音楽と
歩く基本
・みんなでステップ
言葉とリズム
声をあわせて
リズムあそび
・身体を使って音楽を感じる、楽しむ、伝える
・道具を使ったリズムあそび
・楽器を使ったリズムあそび
まとめ

図3 『おんまはみんな』の歌詞

- おんまは みんな ぱっばか はしる
ぱっばか はしる ぱっばか はしる
おんまは みんな ぱっばか はしる
どうして はしる
どうしてなのか だれもしらない だけど
おんまは みんな ぱっばか はしる
ぱっばか はしる ぱっばか はしる
おんまは みんな ぱっばか はしる
おもしろいね
- こぶたの しっぼ ちょんぼり ちょろり
ちょんぼりちょろり ちょんぼりちょろり
こぶたの しっぼ ちょんぼり ちょろり
どうして ちょろり
どうしてなのか だれもしらない だけど
こぶたの しっぼ ちょんぼり ちょろり
ちょんぼりちょろり ちょんぼりちょろり
こぶたの しっぼ ちょんぼり ちょろり
おもしろいね

(譜例5)

3. 『おんまはみんな』（アメリカ民謡）を用いた音楽表現の指導法詳細

3-1 歩く基本

3-1-1 歩く前に

リズムあそびで使用する部屋（保育室、教室、リズム室等）を走ったり、跳んだり、歩いたり、這ったりと自由に動き、スペースを認識する。子どもの動きに任せるが、声かけをしながら、人とはぶつからないようにあらゆる場所を自由に動くように促す。例えばばらばらの方法や方向で動いたり、同じ方法や方向で動いたり、一緒に止まったりする。止まったときに、周りの人とおしゃべりをしたり、ジェスチャーをしたりする。合図でまた動く。どのような合図でもよいが、タンブリンを使うと、トレモロ奏で注意を促し打点で止まるように指示が出せる。

3-1-2 ストップ&ゴー

ストップ&ゴー（合図によって動いたり静止するゲーム）をする。合図役の「スタート」の合図でみんなが自由に走り「ストップ」の合図で止まる。合図役は止まっているときに動いた

人を探してタッチして、タッチされた人が次は合図役になる。このとき、なるべく長い間、無音＝無音で止まっている状況を楽しむように促す。

音楽で保育や授業を展開するとき指導者は子どもに「音をよく聴く」ということに注力する。「音をよく聴く」ことは重要なことだが指導者は「音の無いところから音楽が始まる」という意識を持っていなければならない。静かな中で聴こえてくる音の方が、誰であっても聴こえやすい。子どもにとって音楽の始まりはまず無音であることが当たり前になると、衝動的に歌ったり音を鳴らしたりするだけでなく、予め音を頭で考えて表出することも容易くなる。指導者が子どもに静寂を求めるとき「静かに」と言って制するのでは、一時のことになりがちであることと、「静かに」というその言葉自体が次に流れてくる音楽の妨げになる。そこで指導者は、静かなことの続きに楽しいことが始まるルーティーンを確立しておくことが、様々な音楽あそびを展開する上での基盤となる。

(譜例6)

3-1-3 音の数を聴く

ストップ&ゴーの次の展開として自由に動いている中で、タンブリンのトレモロ奏による合図の後、1つ打つ音が聴こえると1人で座る。2つであれば2人組というように、鳴った数の人数でグループを作って座る。合図の数は年齢によって異なるが、リズムフレーズを聴き取ってグループになることができる。譜例6のリズムフレーズは、4分の4拍子1小節で4拍目は4分休符である。これは日々の別の音楽あそびの中の、言葉のまねっこやリズム模奏の内容とリンクさせているためである。聴き取ったリズムフレーズをみんなでならしたり、グループごとでならしたり、言葉をつけたり、強弱をつけたり、カノンにしたりと様々に展開する。

The image shows four rows of musical notation, each representing a different group size. Each row has three measures labeled ①, ②, and ③. The notation uses vertical stems and horizontal lines to represent notes and rests. The first measure of each row starts with a circled number (1, 2, 3, 4) indicating the group size. The notes are placed on a four-line staff, and rests are indicated by vertical lines with flags. The patterns show how the number of notes in each measure corresponds to the group size.

ここでも指導者は、子どもがどんなリズムで何人グループだろうかとワイワイと賑やかに相談する場面と、リズムを発したり、他のグループのリズムを聴いたりするときの静かな場面とのコントラストをしっかりと意識して進めることがポイントになる。

3-1-4 ピアノを用いたストップ&ゴー

タンブリンの合図で動いていたことを、ピアノでの音楽を合図にして動く(譜例1～4)。何度でも繰り返して最後は2番に入って終わる。曲が始まったら進み、止ったら動きも止める。上記(3-1-2)の様に、音楽が無く走ったり歩いたりするより、軽快な楽しい音楽の流れを聴きな

がら動く方がより気持ちも高揚する。音楽に合わせてのストップ&ゴーは、それだけでレクリエーション的な面白さの役割を果たす。子どもの様子を伺いながらランダムに音楽を止めて、止まっている間もランダムにすることによって、より一層緊迫感が増し愉快的あそびとなる。ここでは、号令ではなく、音楽を使って楽曲に合わせて動いているわけではあるが、ここでのピアノの役割は、BGMと合図の役割に過ぎない。従って子どもも音楽を捉えているわけではなく、「音」に反応しているだけにとどまってしまう。

3-2 音の反応から音楽への反応へ

「音」に反応する表現のみならず、「音楽」を捉えて活動する身体表現の体験を積み重ねることによって音楽を深く捉えることができるようになる。本節では実際に行った具体例を述べていく。

3-2-1 歩く

自由に走ったり歩いたりするところから、音楽の拍の流れにのって動く経験を積み重ねる。前奏に続いて4分の4拍子の1拍[4分音符]に合わせてA(8小節)の部分を使って歩く(譜例7-①)。「ぱっぱか ぱっぱか」というリズムカルな言葉にのって、4分音符に合わせて歩く。まずは大円になって同じ向きに歩く。足音と周りが見え易いことで揃える気持ちになる。

(譜例7)

The musical score is written for piano in 4/4 time. It consists of three systems of music. The first system shows a melodic line in the right hand and a bass line in the left hand. The second system is a repeat sign with circled numbers 1, 4, 2, and 5 indicating specific measures. The third system continues the melody and bass line, ending with a Coda section marked with circled numbers 3 and 6.

3-2-2 歩いてストップ&ゴー

ストップ&ゴーの要素も入れる。ストップのタイミングをアトランダムにして偶発的なスリリングな面白さを楽しむ。譜例7-②や③のようなところでのストップも入れると急に止められた感じが増す。

3-2-3 低音のクラッシュ

ストップのタイミングのところで、低音のクラッシュの音を入れる。この音が聴こえたら、歩く代わりに拍に合わせてケンケン片足跳びにする。ピョンピョン両足跳びにしたり後ろ歩きにしたりなど年齢やクラスに合わせて動きを決める。もう一度聴こえたら歩くにもどる。

3-2-4 高音黒鍵アルペジオ

ストップのタイミングのところで、高音の黒鍵でアルペジオを入れる。この音が聴こえたら、方向転換する。

3-2-5 ミックス

静止、片足跳び、方向転換の中から2種類を混ぜて、できるようになったら3種類を混ぜる。テンポや強弱などニュアンスを変えて展開する。

3-2-6 ストップの予測

譜例7-④、⑤、⑥のところでストップする。このとき当該小節の3拍目と4拍目ではほんの少しrit.をかけてここでフレーズを収めるようなニュアンスで奏する。そこでピッタリとストップできたことを「先生がここでストップしようと思ったのがよくわかったね！」と驚き、賞賛する。全員ができていなくても、賞賛することで注意喚起されて次につながる。ここからは合図になる音は必ずフレーズの切れ目（譜例7-④⑤⑥のようなところ）に入れる。フレーズの予測可能などところに入れてフレーズ感を養う。友達とペアになって一緒に歩く。競って止まるところの予測に注力する。

3-2-7 音楽の始まり

音楽の始まりを意識する。前奏（譜例8-①）に続いて曲（テーマ）が始まることを意識付ける（後述）。前奏は歩かず聴いて、テーマの始まり（譜例8-②）から歩く。ペアで足を揃えてテーマの始まりで出られるように合わせてみる。ここから常に前奏は動かさず聴くようにする。

3-2-8 音楽の終わり

音楽の終わりを意識する。曲の後半4小節辺りからの音にアクセントを付けて、曲の終わる感じを強調した演奏をする。子どもは曲が終わった時に足が止まっていることを意識する。4拍目まで歩くと止まった感じがわかりにくくなるので3拍目で足を止め、最後の拍（譜例8-③）はクラップをする、手を上げて「へイ！」と掛け声でしめる、ペアのときは相手とハイタッチするなど、はっきりした表現をするとよい。

（譜例8）

The image shows a musical score for a piano introduction and a 4-measure section. The score is written in 4/4 time and B-flat major. The introduction is marked with a circled '1' and the word '前奏' (Introduction). The 4-measure section is marked with a circled '3' at the end. The score consists of three systems of staves, each with a treble and bass clef. The first system shows the introduction, the second system shows the first two measures, and the third system shows the last two measures.

3-2-9 Bの部分

前奏からコーダまで把握できたら、Bの部分をつける。

BはAと曲想のちがいができるように、動き方を変える。止まったままで体をゆらゆらさせたり、腕組みをしたり頬を押さえたりして首をかしげたり、ペアのときは両手をつないでゆらゆらしたり、片手ずつゆっくり握手をしたり、片手をつないでまわったりと、曲想の異なる部分であることを留意する。

3-2-10 一曲全体

〔前奏—A—B—A—コーダ〕と通して一曲全体をステップする。

大円で同方向に動いていたが、好きな方向に一人で自由に動いたり、ペアで一緒にお散歩したりする。ここまでの約束事が身につについて音楽に合わせて歩きたくなっているので、自由な方

井本：多角的成果を得る音楽表現指導の指導法

向に動ける。もし混乱しそうになったら、ストップ&ゴーの静止を使って状況を整える。慣れると、ペアでスタートは大円で始めて、A-B-A'は自由な方向に動き、曲の終わりを予測（認識）してコーダで出発した地点にもどってきてハイタッチする。年齢によっては、Aは一人で歩き、Bで友達とペアで動き、A'でまた一人で歩くということもできる。

繰り返してステップするとき、ペアを変えたり探したりする間、そのたび毎に音楽が止まったら流れが途切れてしまうので前奏部分を間奏に使用して繰り返すとよい。

(譜例9)

(何回でも)



3-3 拍を捉える

音楽に合わせて歩く基本のステップができたなら、より拍を意識付けたステップにすすむ。

3-3-1 8拍フレーズ

Aの部分を使う。2小節のまとまりにして全体を8拍で考える。

4拍歩いて4拍止まる。5拍歩いて3拍、6拍歩いて2拍、7拍歩いて1拍止まることになる。

① 4拍歩いて4拍止まる (譜例10)

[1-2-3-4-トーン-トーン-トーン-トーン] あるいは

[1-2-3-4-おーやーすーみー]

(譜例10)



② 5拍歩いて3拍止まる (譜例11)

[1-2-3-4-5-トーン-トーン-トーン] あるいは

[1-2-3-4-1-トーン-トーン-トーン]

(譜例11)

Musical score for Example 11, 4/4 time signature. The score consists of two systems of piano accompaniment. The first system has a treble clef and a bass clef. The second system also has a treble clef and a bass clef. The music is in a minor key (one flat). The melody in the treble clef consists of quarter notes and eighth notes. The bass clef provides harmonic support with chords and moving lines.

③ 6拍歩いて2拍止まる (譜例12)

[1-2-3-4-5-6-トーン-トーン] あるいは

[1-2-3-4-1-2-トーン-トーン]

(譜例12)

Musical score for Example 12, 4/4 time signature. The score consists of two systems of piano accompaniment. The first system has a treble clef and a bass clef. The second system also has a treble clef and a bass clef. The music is in a minor key (one flat). The melody in the treble clef consists of quarter notes and eighth notes. The bass clef provides harmonic support with chords and moving lines.

④ 7拍歩いて1拍止まる (譜例13)

[1-2-3-4-5-6-7-トーン] あるいは

[1-2-3-4-1-2-3-トーン]

(譜例13)

Musical score for Example 13, 4/4 time signature. The score consists of two systems of piano accompaniment. The first system has a treble clef and a bass clef. The second system also has a treble clef and a bass clef. The music is in a minor key (one flat). The melody in the treble clef consists of quarter notes and eighth notes. The bass clef provides harmonic support with chords and moving lines.



止まる部分は「ペンギンさんのお手々のまねをして腕を伸ばして手首を曲げて体の両脇にトン・トン・トンとタッチ」したり、「アヒルさんのお口のように両手でお口をつくってクワックワックワックとまね」したりと、そこで拍が刻めるポーズを子どもと色々考えてステップと組み合わせていく。始めから歩くとわかりにくい場合は足踏みして一緒に数えながら行う。

3-3-2 バリエーション

[1-2-3-4-……]と拍を数えているところは、「とん・とん・とん・とん・ひげじいさん」の手遊びのように両手グーにして縦に重ねていく。そしてトン・トンと拍を刻んでいるところはペアで色々なバリエーションが展開できる。両手でハイタッチ、一人が両手パーで待ちもう一人が指でタッチ、二人で同じ指どうしでタッチなど。また好きなポーズを子どもたちが考えて皆でまねをしたり発表しあったりする。子どもの自由な発想をどんどん引き出してその表現に共感しあって、みんなで楽しむ。

3-3-3 ジャンケンゲーム

クラス全体やグループでジャンケンゲームにも発展できる。

[1-2-3-4-ジャン-ケン-ポン- (トン) -]

音楽の中で勝ち負けにこだわらず音楽の流れの中でのゲームを楽しむ。負けるジャンケンやあいこのジャンケンや両手ジャンケンなど色々なバリエーションで楽しめる。

3-3-4 ステップ

8拍の流れが定着したらステップしながら実践する。

基本のステップ(3-2-1~3-2-10)の上に積み重なっているので、このステップをするときも前述の静止や片足跳びや方向転換も組み合わせて進める。1人でもペアでも、また、3人、4人と人数を増やして腕を組んでみんなで横一列になってステップするのも楽しい。好きな場所に進む、元の場所に戻るというのもこの段階では容易にできる。

3-3-5 一曲全体

Aの部分を繰り返しているが、定着したらBは前述(3-2-9)の動きを使い、曲の終わりで止

まることを意識して一曲を通す。子どもは音楽あそびの中で楽しみながら何度も何度も繰り返すので等速感や拍のまとまりを身につけることができる。音楽の流れの中で音楽に合わせて友達と共感し合っって動く心地よさを実感しながら、音楽を聴取して自ら表現していくことへの達成感も味わうことになる。

3-4 前奏について

前奏は、曲の始めのテーマへの導入を行う部分である。つまり曲のテンポを示すというだけではなく、曲全体の雰囲気を作り上げ、イメージを豊かに広げる役割がある。子どもの歌唱や合奏においても常にその役割は大きく、前奏を奏でる指導者は子どもが前奏を聴いてその曲の世界に入り込むように演奏しなくてはならない。前奏によって次の表現活動が引き出されると言っても過言ではない。しばしば保育者はとにかく曲の最後を弾き、アインザッツのために一本調子で「1、2、3ハイ」と声かけをする。特に長年このやり方をしている指導者はそれが曲の始まりのスタイルに定着してしまっている。この「1、2、3ハイ」の声で音楽のイメージが壊れてしまうことが少なくない。短いフレーズの模唱や模奏をするときや、曲の途中から始めるときや、部分練習のときなど、合図が有効なことも多く適切な合図の声かけは重要である。しかし、日ごろの音楽体験の中で、曲の始まり、曲の終わりを聴き取ることができれば号令は必要ない場合が多い。とりわけ音楽を聴いて体を動かして活動する場合、子どもが気持ちよく合わせられるというのは指導者の音楽での誘導の仕方に大きくかかわってくる。受講生には実際に合わせにくい前奏（譜例14、15）で動く経験をして前奏の在り方や合図の必要性について再考させる。

（譜例14）



（譜例15）



3-5 この後の展開

3-5-1 歌

軽快なリズムによく合った歌詞を楽しみながら歌う。歌詞を付けて歌いながらステップしたり、しっかりと立って美しい声で歌ったり、オノマトペで歌ったり、そのオノマトペの語感に合わせたステップをしたりできる。

3-5-2 道具を使ったリズムあそび

ボール、フラフープ、ゴム、縄、ステップリングなど道具を使ったリズムあそびができる。

3-5-3 楽器

楽器を使ったリズム合奏を体験する。ステップに合わせたリズム奏をすることで容易にアンサンブルができる。

4. 結果と考察

2018年度の2回の教員免許状更新講習の感想及び事後レポートから講習での指導内容の汎用性と今後の課題を探る。具体的には教えたり習ったりする音楽指導ではなく子ども自ら身体を使って音楽表現する活動が実践され得るのか、また歩くことを基本とした音楽の流れを捉える様々なリズムあそびの体験から歌や合奏など各自が到達目標とする活動へつなげていく展開方法が実践され得るのかを考察する。

感想の記述内容では、実際に表現活動を体験したことに関しては、80%の人が意見を述べその全員が楽しさを実感していた。『おんまはみんな』一曲だけで様々な展開が可能であったことに関しては57%の人が述べ1曲での展開方法の幅広さを理解していた。ピアノを使わない音楽活動に関して19%の人が驚きとすぐに取り入れたいこととして述べていた。また、ピアノ演奏やその役割に関して49%の人が意見を述べていた。そのことから演奏の際のイメージの大切さ、前奏の意味、演奏表現によって語らず音楽あそびが進行すること、リトミック用の曲でなくても身体表現ができることなど多岐にわたったがピアノの多彩な演奏の可能性や重要性を十分に感じて受け止められていることがわかった。

レポートの課題は「本日の講習内容をどのように活用しますか。具体的な保育・授業案を考えて述べて下さい。」である。受講生のレポート内容から研修項目がどのように反映されているのかを分析した。A「ストップ&ゴー」、B「リズム奏」、C「ことばとリズム」、D「歩く」、E「拍を捉えたステップ」、F「ボールを使ったリズムあそび」、G「歌」、H「楽器あそび、合奏」の8項目に分けて保育案・授業案に反映されていた部分に○を入れた表(図4)にまとめた。(△、▲については後述。)

図4 レポート内容からの研修内容の反映

	A	B	C	D	E	F	G	H	※
1		○	○			△			保
2		○				△			保
3		○						▲	保
4	○	○		○				○	保
5	○	○						▲	保
6									保
7	○	○			○				保
8			○	○			○		保
9				○	○	○		○	保
10						△			保
11				○					保
12	○					△			幼
13	○			○					幼
14	○	○	○			△		▲	幼
15	○			○	○		○		幼
16	○			○				○	幼
17						△	○		幼
18		○	○					▲	幼
19				○				○	幼
20			○			△			幼
21			○			△			幼
22		○							幼
24				○				○	幼
25				○	○			○	幼
26		○	○					▲	幼
27	○	○	○			△		▲	幼

	A	B	C	D	E	F	G	H	※
28						△			幼
29		○	○						幼
30	○	○			○	○		○	幼
31	○								こ
32					○		○	○	こ
33		○	○				○	▲	こ
34	○	○	○					▲	こ
35							○		こ
36		○	○	○					こ
37		○		○					支
38				○				○	支
39	○			○					小
40		○	○			△			小
41	○	○	○	○				○	小
42		○	○						小
43		○		○		○			小
44	○	○			○			○	小
45			○						小
46		○				△	○	▲	小
47		○				△		▲	小
48	○			○		○		○	他
49				○		○		○	他
51				○	○				未
52	○			○	○				未
53	○	○		○	○		○	○	未
54		○	○						未

NO.6 は具体記述がなかった

※勤務先 保…保育園 幼…幼稚園 こ…認定こども園 支…支援学校 小…小学校
他…その他 未…未定

図5 講習時間と集計

	項目	本稿記載の章	今回のおよそ の講習時間	記述 人数	%
A	ストップ&ゴー	3-1-1, 2, 4	40分	18人	33%
B	リズム奏	3-1-3	30分	26人	48%
C	ことばとリズム		20分	16人	30%
D	歩く	3-2-1~10	70分	21人	39%
E	拍を捉えたステップ	3-3-1~5	70分	12人	22%
F	ボールを使ったリズムあそび	3-5-2	80分	19人	35%
G	歌	3-5-1	10分	8人	15%
H	楽器あそび、合奏	3-5-3	10分	23人	43%

この講習では前述のとおり本稿で取り上げている「歩く基本」「みんなでステップ」以外の項目を一日に講習している。全体像を体験した上で全ての基盤と位置づけた「歩く基本」「みんなでステップ」がどのように捉えられているのかを検証する。

感想の中では「歩くリズムあそび」の体験の楽しさやうれしさを80%の人が実感しているが実際の指導では約半分の39%の人にしか指導法に活用されていなかった。A「ストップ&ゴー」、B「リズム奏」、C「ことばとリズム」は3割以上の人が活用している。最も活用された「リズム奏」は約半数の人が取り入れた。この3項目はピアノが必要なく、B、Cは広い場所も必要ないので取り入れ易い項目である。特に小学校では教室の関係で広くステップすることを音楽で取り入れることは難しいということが感想からわかった。D「歩く」は39%であるが、E「拍を捉えたステップ」は22%と減少する。ピアノに関する記述の中にもあったが、得意な1曲を伴奏や表情を変化させて弾くことで展開できることを説明するが、具体的な譜例がないと実践しにくいということである。F「ボールを使ったリズムあそび」はとても楽しい内容なので活用したいという意見が多かった。Fが楽しかったのはD、Eの活動を経たことで楽曲がしっかり捉えられて友達との共感性が上がったところでの活動であったからである。しかし、いきなりFの活動から始めても同様の成果が得られると受け止められ「歩く基本」「みんなでステップ」の音楽経験が楽しさの要因になっていることの理解は不十分であることもわかった。項目のつながりをみるとDあるいはEの活動を経ずFの活動に取り組む人(図4△)は13人、DあるいはEの活動を経てFにつなげた人は5人であった。同様にH「楽器あそび、合奏」は43%の人が取り入れたがD、E、Fの音楽体験の積み重ねがあるから10分足らずで音楽的な合奏が仕上がるという構図の理解は不十分であることがわかった。DあるいはEの活動を経ずFの活動に取り組む人(図4▲)は10人、DあるいはEの活動を経てFにつなげた人は14人であった。

A、B、Cは指導者にとって取り組み易い活動ではあるが、子どもが全身を使って音楽を表現する音楽あそびは指導者にとっては準備も指導力もより要求される。よって敬遠されることになるのではないかと危惧される。事後の感想からも身体表現活動の楽しさとその活動の意義は指導者自身が体験して学ぶことで実感されることがわかった。講習や授業で曲の展開の指導法は体験しながら身に付け、演奏レベルに合ったピアノ譜で曲も弾けるようになる。しかしステップや音楽あそびのときの具体的な楽譜がないと実践に至りにくいこともわかった。指導法を理解して広く実践されるためにより具体的な指導手法や教材を提示することが不可欠であり今後の課題となる。

<注釈>

注1...教員免許状更新講習受講生、大阪音楽大学指導者研修受講生、現職教員・保育士研修会などの受講生。

注2...夙川学院短期大学「保育内容音楽表現Ⅰ」「リトミック」受講生・大阪国際大学短期大学部「保育内容の研究・幼児の表現Ⅱ」「音楽Ⅱ」受講生、大阪音楽大学「ピアノ指導法BⅡ」受講生、大阪音楽大学短期大学部「ピアノ教授法A」受講生

注3...本稿の譜例1～15は全て筆者編曲の楽譜

<引用・参考文献>

1...文部科学省『幼稚園教育要領』（2017年3月）

2...厚生労働省『保育所保育指針』（2017年3月）

3...L. チョクシー／R. エイブラムソン／A. ガレスピー／D. ウッズ 訳者板野和彦（1994）
『音楽教育メソードの比較』全音楽譜出版社 p.59

（付録譜例1） ピアノ初心者用

The image shows a musical score for piano beginners, consisting of three systems of two staves each (treble and bass clef). The music is in 4/4 time and features simple rhythmic patterns and chords. A triplet of eighth notes is marked with a '3' above it in the first system.

Musical score for piano, consisting of three systems of two staves each. The first system shows a melody in the right hand and a bass line in the left hand. The second system continues the melody and bass line. The third system includes a first ending (1.) and a second ending (2.), with a triplet of eighth notes in the right hand leading into the first ending.

(付録譜例2) ピアノ初級者用

Musical score for piano, consisting of five systems of two staves each. The first system shows a melody in the right hand and a bass line in the left hand. The second system continues the melody and bass line. The third system continues the melody and bass line. The fourth system continues the melody and bass line. The fifth system continues the melody and bass line, ending with a triplet of eighth notes in the right hand.

(付録譜例 3) ピアノ中級者用

(付録譜例 4) ピアノ上級者用

The image displays a musical score for piano, advanced level, consisting of seven systems of two staves each. The key signature is one flat (B-flat) and the time signature is 4/4. The score features a variety of musical techniques, including chords, arpeggios, and triplets. The first system shows a right-hand melody with chords and a left-hand accompaniment of chords. The second system includes a repeat sign in the right hand. The third system continues the chordal accompaniment. The fourth system features a right-hand melody with a triplet and a left-hand accompaniment. The fifth system has a right-hand melody with triplets and a left-hand accompaniment. The sixth system features a right-hand melody with triplets and a left-hand accompaniment. The seventh system continues the chordal accompaniment.

